緑爽会会報　No. 148

2017年2月24日発行

日本山岳会　緑爽会

発行人　富澤克禮

デザイン･制作　関塚貞亨

今年最初の会報です。また本年もよろしくお願いいたします。

～～《**報告**》～～

恒例となった１月例会＜七福神巡り＞

ここ数年恒例となった感のある「七福神巡り」。今年は東海七福神を巡った。川口さんが用意していただいたハガキで送られてきた感想を掲載しています。寒い日にもかかわらず、参加者のためにいろいろ準備されたことで、心が温まるイベントになったことが窺われます。渡部さん、川口さん、ありがとうございました。　（荒井正人）

実施日：１月１４日（土）　　担当：渡部温子、川口章子

参加者：１５名

後列左より：西谷可江、小清水敏昌、小清水さんの奥様、富澤克禮、深田森太郎、田井さんのご友人、西谷隆亘、渡邊貞信

前列左より：小泉義彦、渡部温子、川口章子、鳥橋祥子、田井具世、島田稔、松本恒廣

《皆さんから寄せられた感想》

松本恒廣

私にとってはここは二度目だが、今回の方が十二分に楽しめた。天気に恵まれ、メンバーに恵まれ、安政創業の吉田屋の昼食に大満足、そして、最後の品川神社での甘酒も。これ迄に武蔵五日市、柴又、青梅、そして東海。来年は何処で？鎌倉、湘南、ちょっと遠出して都留あたり如何か。

渡部温子

風花が舞ってきたが心配することもなかった。歴史と由緒ある寺社を訪ねる七福神巡りを、海抜2．4mあたりの磐井神社から歩き始めました。一心寺前の海抜は4．6m。しかし、平坦な道は第一京浜を渡るまでで、鳥居の下から仰ぎ見るような石段を上がると品川神社。社務所のお許しを得て、ここで本日初めての休憩時間をとり解散しました。

品川神社の階段を下りながら、鳥居の柱の中ほどに龍の彫り物らしいもののあることに気付きましたが、もしや描いたものかも知れないと思い後日、確認しに行きました。やっぱり彫り物でした。

昭和35年に訪れたときの記憶にある、神社から東京湾が見えたことを社務所で話したら、海は東京オリンピックの首都高速の工事の始まったころから徐々に見えなくなったとのこと。今更ながら過ぎた歳月を感じました。神社が現在のように建て替えられたのもオリンピックの年と聞き、何とも言えない複雑な気持ちでした。

小清水敏昌

緑爽会主催の旧東海道七福神巡りに家内と参加させて頂きました。川口様、渡部様が事前に予行、準備をして下さり、また先々で土地や歴史にまつわるお話があり、七福神だけでなく歴史を身近に感じられる一日になりました。

新しい発見もあり、調べて改めて訪ねてみようと思いました。お二人がおやつ、シャンパン、おつまみ、暖かい飲み物（甘酒）などをご用意くださり、ご配慮に感謝です。とても楽しい一日でした。途中でユキの舞うほどの寒さでしたが、身も心も暖まる満足した歴史巡りでした。

昨年12月に入会させて頂き、初めての野外集会に参加しました。

今後とも宜しくお願いいたします。

田井具世

京急線大森海岸駅 10:00 集合。曇天の寒空の中を元気に出発。先ずは品川神社。貫禄ある大銀杏の御神木は幾年月社を見守っていたのでしょう。タッチしてしまう。次は養源寺。周辺を眺めていましたら雪が舞い「アッ雪」とうれしくなったのですが、一瞬のうちに消えてしまった初雪でした。

後5か所あるのですが、中間はとばして最終の品川神社に行ってしまいます。富士塚のある神社。今までは平坦な道ばかりでしたが、品川神社は 35 段の石段を上がり、足腰が少し鍛えられたように思えました。1887 年に源頼朝公が創建。室町時代中期に太田道灌が素戔嗚尊と祀り境内には宝物殿、板垣退助の墓所もあり家康公合戦勝利祈願をしたゆかりの社とパンフレットに記してありました。富士塚は裏から見たら富

士山の姿。

解散時には持参して下さったシャンパン、ポットに入れた糀の甘酒、無事巡り終えて乾杯。冷え切った体がじわじわと暖まり、皆様と楽しんだ寒い一日は運が開けていくような年の始まりになりました。

＜大辞林より＞

・品川神社（大黒天）　僧侶の妻・梵妻

・養源寺（布袋尊）　日常生活用具を入れた袋を背負い、杖を持って市中を歩き人の運命や天候を予知。弥勒の化身とも言われた。中国。

・一心寺（寿老人）　長寿を授ける神。長頭で鹿を連れた巻物を先につけた杖を持つ、宋代の人物の偶像化。中国。

・荏原神社（恵比寿）　商売繁盛の神。烏帽子姿

・品川寺（毘沙門天）　福の財をもたらす神。

・天祖諏訪神社（福禄寿）　福禄を授ける。短身長頭。経巻を結びつけた杖を持ち、鶴を従える仙人。中国。

・岩井神社（弁財天）　インドの河神。音楽、智慧、財物の神

川口章子＜七福神めぐりと寿老人と自然保護活動＞

私の新年七福神めぐりも今年で10回になる。毎回、人々の幸せに応えてくれる七福神信仰の作法に従って祀られている七福神で固有の性格と得意分野に願いを込めて手を合わせていたが、今回の東海七福神めぐりで「えー！」と気がついたことがあった。

それは七福神の固有の性格と得意分野はかなり理解できていると思っていたが、「持ち物など」についてである。神の持ち物を確認してみると、大黒天は「打ち出の小槌」、恵比寿天は「鯛」、布袋尊は「布袋」、弁財天は「琵琶」、毘沙門天は「三叉槍と宝塔」、福禄寿は「白鶴と経巻を結んだ杖」。この六福神の持ち物の関係は理解出来ていたが、寿老人の持ち物について気になっていたことを思い出した。かつて、谷中七福神巡りをした時の谷中の長安寺に徳川家康が納めたといわれる寄せ木彫刻の等身大の寿老人は右脇にシカを従えていた。寿老人は長寿を記した巻物をつけた杖と1500年生きているといわれている黒いシカ（玄鹿：その肉を食すと数百年生きられるという）を連れ、不死の霊薬を含んでいる瓢箪を運び、長寿のシンボルである不老長寿の桃を手に持つことから人に延命長寿の福徳を授けると言われている。

長寿と自然との調和のシンボルであるシカが自然保護の問題になっている。神の使いとされた春日大社の二ホンジカ、山岳崩壊とシカ、シカと自然と人のよい関係を築く大事な時にいる重大さを思い知った。

（参考資料：新ハイキング選書　第35巻「東京近郊　七福神めぐり」）

渡邊貞信

入会後初めての例会に参加でき、年の初めのめでたい七福神めぐりは私にとって思い出に残る楽しい一日でした。

厳しい寒さの中でしたが仲間の方々皆和気あいあいで最初の緊張はどこへやら、すぐに溶け込み幸先良いスタートができました。

昼食に選定していただいた吉田蕎麦店は歴史のある素敵なところで会食でき嬉しかったです。

今回担当して頂きました川口様、渡部様には事前の下見や昼食場所の選定等で大変お世話になり、ありがとうございました。 また、最後の品川神社の境内で頂いたシャンパンや甘酒など気配りいただき体も暖かくなり、とても美味しく感謝いたしました

この度は、関係された方々にいろいろご配慮いただき楽しい一日を過ごせましたことを感謝いたします。ありがとうございました。

西谷可江

泪橋。橋の名前に強く心惹かれた。何か謂れがあるにちがいない。天祖神社から歩いてほどなく、浜川に架かる橋。現在は浜川橋となっている。鈴ケ森刑場跡を見学した後だったので余計に橋の名前が気になったのかもしれない。処刑される罪人と見送る人との悲しい別れの場所がこの橋であったいう。この世との別れと今生の別れに、どれほどの泪が流されたことか。刑場跡にあった火炙りや磔用の柱を立てた礎石・首洗い井戸。明治初年まで続いたという残虐な処刑の数々を思い、数多の霊に合掌した。また、私の好きな児童文学のひとつ、斎藤隆介の「ベロ出しチョンマ」を滝平二郎の切り絵の挿絵とともに思い出した。年貢軽減を直訴しようとした父親はじめ、幼い子供ら家族全員が見せしめのために磔になった話。我が国の処刑史を概観してみれば、その残忍さに戦慄をおぼえる。

最後の参詣は、品川神社。石彫の七福神の満面の笑顔が実に素敵であった。「笑う門には福来る」。私も笑顔で過ごせますようにと、わが心の平安を祈りながら七福神参詣を終えた。ひととき、風花も舞った寒さの中、お世話くださった川口さん、渡部さんのあたたかいお心遣いに心ほかほか、頂戴したシャンパン、甘酒に身体ぽかぽかと至福のひと日となりました。 （写真：小泉義彦）

12月例会　講演会/忘年会

開催日：１２月２２日（木）

参加者：梨羽時春、松本恒廣、福田光子、関塚貞亨、吉田理一、里見清子、渡部温子、鳥橋祥子、大島洋子、島田稔、小清水敏昌、富澤克禮、夏原寿一、瀬戸英隆、田井具世、川口章子、深田森太郎、小泉義彦、西谷隆亘、石塚嘉一、中村好至惠、荒井正人、小原茂延（以上２３名）

忘年会に先立ち「初めてのヒマラヤ」と題して荒井会員より旅の話と写真説明があった。
ヒマラヤ行きを勧めた瀬戸会員による講演の概要です。

講演「初めてのヒマラヤ」 **瀬戸英隆（報告）**

先ず、初めてヒマラヤに挑戦し５５４５ｍのカラ・パタールに目標を定めた経緯について話しがあり、筆者の強い勧めがあってのことだと説明があった。川崎市民同士ということもあって交際が始まり、先輩岳人は皆スイスを経てヒマラヤに向かった古事を見習い、貴殿もスイスを経験しているのなら是非と、圧倒的景観のヒマラヤ行きを勧めた次第。以後荒井氏の応援団長を自称し今日に至っている。

一方具体的なアドバイス等をしてくださった平松氏は筆者とＪＡＣ入会が同期で、山岳写真家白旗史郎氏の愛弟子。ヒマラヤのユキヒョウを自認し、最高到達点はマカルーの７５００ｍであり、毎年何回もヒマラヤに通うすばらしい岳人である。

このアドバイザーと応援団長の押しを受け氏と同行する事になったのが、７９歳の元駐英大使の林貞行氏である。医師いわく、彼の肺機能年齢は９７歳！とのこと。肺がんなどを過去に経験している由。

さて、一日遅れで１０月２２日に羽田を出発した二人は２３日には早くもカトマンズからルクラに達し、パクディンでロッジ泊。２４日はパクディンからナムチエバザールに至っている。いわゆる有名なエベレスト街道である。　片道約６０ｋｍの行程だ。
ナムチエで２泊し２７日にはデンボチエに至りロッジ泊。２８～２９日は停滞して高度順応。３０日ロブチエに到達している。（筆者注：かなり早いハイペースに驚く）
３１日には最後の宿泊地ゴラクシエブに達し登頂を伺う。

１１月１日、カラ・パタール登頂に成功しその足でロブチエまで下って一泊。２日ロブチエからパンボチエに至り一泊。３日ナムチエバザールに下山、事実上登山行程を終わり、４日パクディン泊、５日ルクラ泊、６日カトマンズ帰着。７日～８日と市内観光をし、９日夜カトマンズ発、１０日早朝帰国。全行程２０日。通常より２～３日早い！

以上の記録の講演の後、１００枚近い写真がスライドで映写された。はじめにカラ・パタールから見たエベレスト、ヌプツエ、プモリの圧巻は筆者も懐かしさで胸が一杯になった。
すばらしい講演とスライドをやってくれた荒井さんに応援団長として再度お勧めしたい。
次は６０００ｍを狙え、ヒマラヤの６０００ｍ未踏峰はそれこそ山とあるのだよ。前年の関西支部の初登頂に参加した若きクライマーはヒマラヤ初見参であった。見習うべし。更に７０００ｍも夢では無い。あの行程でほぼ高度障害がなかった氏は将に適格者です。

今後、岩と氷雪の訓練をして是非もう一度講演の台に乗ってください。心から応援します。

忘年会　　夏原寿一（報告）

「乾杯」の指名を受けた松本さんは先ず「早く飲みたいね～」の一言、そして「カンパ～イ」。合わせて一同グラスを上げてカンパ～イ！　林立する酒瓶、渡部さん、鳥橋さん、川口さんにご苦労いただいた肴と賑やかな笑いで宴が進んでいく。宴の終盤で富澤代表から「何かひとことを」と声がかかり、時計回りにそれぞれが話しをした。そのうちの３つを紹介しよう。

・深田森太郎さん――世田谷文学館で「ヤマ展－百の頂きに百の喜びあり－」（仮称）を開催。会期（予定）7月15日～9月18日。今回の展示では文学に限らず、美術や写真・映画、植物学・地質学・建築学など様々な分野で芸術的・学術的成果をあげた人々の作品を紹介。出品予定者：小島烏水・田辺和雄(植物学者)・吉坂隆正(建築家)・石川直樹(写真家)・田部井淳子・深田久弥 ほか。日本山岳会も協力。

・渡部温子さん――10 月に他界された田部井淳子さんに最後に会ったのは 6 月 17 日の“有志閑談会”。挨拶に立った田部井さんの話しぶりは病のことなど感じさせない元気さだったが、上体を支えるようにテーブルに置いた腕が小刻みに震えているのを見て、事の重大さを感じた

・小清水敏昌さん――多摩支部では吉祥寺サロンの世話人をしている。医療委員会に所属していて、会報『山』No.868 に寄稿した「メディカルハイキング」が掲載されている。緑爽会への入会を決めたころ、石塚さんから「入会金は 1 万円」とか「入会には審査がある」などと脅された。(一同笑)

～～**《寄稿/投稿》**～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

田辺　寿著　「二人者」に想うこと

近藤　緑

巻頭に掲載された慶應義塾大学體育会山岳部 部報 登高行第Ⅴ号（大正１３年発行）から引用されたオスカール・エーリヒ・マイエルの詩、若者に「高い山で死ぬことを選ぶか、都会で生きることを望むか」という問いかけは、ヒマラヤの未踏峰に挑むのも、まだ占領下の沖縄に三越沖縄店を開店する責任者として乗り込のも、田辺さんにとっては、同じ冒険心だったに違いない。

まだ元気な頃、手軽なリゾート地として何度か那覇を訪れた私は、人気の公共市場のある国際通りの先に立つ三越の大看板をみるたびに、田辺さんの街での挑戦を思わずにはいられなかった。今でも掘れば人骨が出てくるという激戦の島、ヤマトの軍隊の為に沢山の一般人が犠牲になったことを思うと、他の誰もが尻ごみして行きたがらなかったという話も頷ける。しかし、もともと沖縄は、人の心の優しいところである。田辺さんは滞在中、ゴーヤ料理に舌鼓をうち、民俗芸能にも興味ともって親しまれたらしい。すぐに地元に溶け込むことが出来た筈。沖縄の芸能にはプロも門閥もないが、王侯と神に捧げるために、島民の多くが蛇味線を弾き、島唄を歌い、沖縄舞踊を踊る。いつだったか、たまたま私が沖縄国立芸能劇場で見た芝居の話をしたら「ああ、ナニナニね」と即座に応えられたのには驚いた。まだ島に諸公が割拠していた頃のお家再興の話で、江戸歌舞伎なら差し詰め「忠臣蔵」とでも言った出しものだったらしい。どこにあっても田辺さんの興味の対象が尽きないのに感心した。

田辺さんにとっても沖縄は忘れ難い所だったと思う、「一度、青春回顧の沖縄旅行をしませんか」と言ったことがあったが、その時はもう奥さまの透析が始まっていて、一泊二日の旅しか出来ないと言われた。

この本に収められているのは、立川高校に山岳部を作り、奥多摩を跋扈した少年時代、慶応に進んでから一年はマルクス研究会（時代の流行か）に入るが、やがて山岳部に入部、先輩の山田二郎、加藤喜一郎氏らを知り、生涯の盟友宮下秀樹さんと出会う。劒岳～槍ヶ岳～穂高まで積雪期縦走を雪洞で通すという大冒険以来、兄貴分の宮下さんに対する畏敬の念は変ることはない。

ヒマルチュリ初登頂のことや、三越からダイエーに移り、銀座プランタン社長やダイエーホーク

ス社長など経営者としては疾風怒涛の日々で平らかなものではなかったと思われる。それでも人の和を第一に考える田辺さんの周りには多くの人が集まった。日本山岳会でもクラブライフを大事にされて、各種集会への参加、趣味のスケッチでは不自由な脚をものともせず「登りたい心で描くスケッチ」旅行を続けておられる。

私の夫・近藤信行は、同じ世代でもある宮下秀樹さんや田辺さんの慶応山岳部が好きだった。伝統的に登山文化を感じていたのだと思う。私は門前の小僧で、とても登山家とは言えないが、多少モノを書いたお蔭で夫共々諸先輩とも親しくさせて頂いた。知りあった頃は。マリ子夫人を透析のために病院に送った後、多摩川の河原でスケッチをする田辺さんだった。二人の墓を建てて、それに埋め込む山の絵の片隅に、マリ子夫人と観た宝塚歌劇にちなんで「すみれ」の花を書き添えたことも聞いた。

晩秋のある寒い日のことだった。田辺さんが私に会いに「こけし屋」に見えるという。私も田辺さんの笑顔の陰のシャイな面を感じているので、気軽に同席者を誘うわけにもいかず、初めてテーブルをはさんで向き合うと、まるで入社試験を受けているような気分になった。

なぜかその日の田辺さんは淋しそうだった。聞けば、この本を出したことで山岳部の後輩から顰蹙をかったらしい。

奥さまへの献身的な介護の末、住みなれた羽村の家を処分して福生の介護マンションで二人きりの生活に入られたことは知っていた。が、それも永くは続かず、マリ子夫人は亡くなられた。だからこの本には、田辺さんを陰で支えたマリ子夫人との出会いから別れまでのいきさつが詳しく書かれている。それは感動的な夫婦愛の記録なのだが、その後に出てくる理学療法士の女性に関する記述には、私も田辺さんの心の率直さに驚いた。

奥さまの死後、「私は若いトレイナーとのリハビリが楽しみです。彼女に夢中です」との葉書を貰ったことがある。いつもその時々の心に正直であることは、田辺さんらしいと思いはしたが、普通なら書かないだろう。田辺さんに特別な思いを持たれた彼女は、病院から移動になり、田辺さんも現在は、近くの通所リハビリで体操をしているらしい。私が週二回通っているのと同じような施設で、平行棒に並んで、脚を上げたり、立ち座りをしたり、集団訓練に耐えている田辺さんを想像すると、私まで淋しくてならなかった。

若い「凛とした」女性トレイナーに心惹かれたとしても、私はそこに田辺さんの孤独の淵を見る思いがする。私と話したかったのも、同じような境遇にある者同士、本音を語りたかったに違いない。心に焼きついた人のことを書きとめたのも、田辺さんの誠実さかとも思われた。

田辺さんが生涯敬愛してやまない宮下秀樹先輩も、田辺さん自身も、そして私共夫婦も、今では予想もしなかった老後を生きている。ほかにも長い付き合いで最愛の夫人に先立たれた友人がいる。山口耀久（文筆家）さん、高室陽二郎（山梨岳連元会長）さんなど、自身も加齢による障害を抱えながら、気丈に生きておられる。

チェホフの芝居の幕切れではないが「生きていきましょうね、田辺さん」。折角のすみれの花が心配しでいますよ。

（写真:夏原寿一）

武田久吉のこと

南川　金一

昨秋、緑爽会で穴田雪江さんの尾瀬・長蔵小屋勤務時代の武田久吉の思い出を聞く集いがあった。合わせて、1964 年制作の映画が写され、尾瀬を歩く 81 歳の武田久吉の姿が強く印象づけられた。今日、われわれが山岳会草創期の故人の姿を偲ぶには、書かれたものを読むことでしか方法はない。しかし武田久吉については、一緒に尾瀬を歩いたという人の思い出を聞くことができ、専門家の手に成る映画があって、矍鑠たる姿とともに声までもが聞かれ、故人の持つ雰囲気、すなわちその人を包む空気感のようなものとともに、人情味・心配りといった内面をも知ることができた。

武田久吉といえば、とかく恐い存在と見られ、「敬して遠ざける」（敬してなれ近づかない。転じてうわべは敬っているような態度をとりながら、内実はうとんじて親しくしない。敬遠する。＝広辞苑）だった。あまり知られていない武田久吉に関する話を二つ――。

辛辣な書評……『日本アルプス縦断記』

武田久吉の思い出を聞く集いで、武田に関する資料として『日本山岳会百年史』に載った「人物コラム　武田久吉」の部分のコピーが配られた。それを書いたのは私とされていたので、私ではなく横山厚夫さんであると、会場で申し上げた。コラムには執筆者が書かれていないから誤解が生じても止むを得ない。そのコラムのなかで、武田の辛口の書評に触れているのが横山さんらしい。

それは、『山岳』第十一年第三号（大正６年９月発行）に載った、『日本アルプス縦断記』（大正６年、大鐙閣発行）の書評である。長谷川如是閑・河東碧梧桐・一戸直蔵の３人の共著で、大正４年の北アルプス縦走登山の紀行文集である。「順序上口絵から批評して見れば、どれもこれも不鮮明にて、折角の神域も俗悪な人間に汚された感あり、中にも『黒岳大雪渓の一部』なる写真には、文字を倒に刷り込みたるは皮肉か悪戯か、兎に角ほめたことには非ず」「三宅雪嶺博士の序文もふるったものにて、…奇天烈な山名に読者の胆を奪ひたる上、著者三人を十返舎一九と比較したところなど、よくいったのやらわるくしゃれたのやら、あまり有難からぬことなり」

「本文の用紙は薄手のラフで、見るからに汚らしい印刷にて、目をわるくしたい人でなければ読むべからず。…白馬をハクバ、大天井をダイテンジャウ、大蓮華をダイレンゲ、燕岳をツバメクラと無理によましてあるなどから推測しても到底、参考になりそうもなく…」と辛口の批評が続く。「之を要するに、本書はあっても無用、なければこれに越したことなしといふ、際物的書籍の一なる可し」と結び、文末にＨ・Ｔのイニシアルがある。この本は、大阪朝日、東京朝日に連載した記事や、雑誌に掲載した文章を纏めたもので、三六判（３寸×６寸）380 頁、布表紙に山の三色刷り版画をあしらった洒落た体裁で、北アルプスの一般的な解説書のない時代であり、執筆者の知名度もあって版を重ねた。山岳会図書室には４冊あって、その最も後のものは大正 11 年発行の第 12 版である。武田久吉の辛口の批評も売り上げにはあまり影響しなかったようである。

『明治の山旅』……創文社版と平凡社版

武田久吉は、山、植物、民俗と多方面にわたり生涯に多くの本を残している。『明治の山旅』は、死去する前年の 1971 年、88 歳の時に、創文社から刊行された。『明治の山旅』は平凡社ライブラリーとして平凡社からも刊行されている。平凡社版には付録として、巻末に「山岳会創立前後」が載っている。「山岳会創立前後」は、日本山岳会創立 60 周年記念講演会（1965 年 10 月 15 日、久保講

堂で開催）における武田久吉の講演記録で、『山岳』第六十一年に掲載された。武田久吉のことであるから、単なる思い出話ではなく、正確な記憶に加えて、山岳会創立当時の記録や日記等の裏付け資料を再確認して講演に臨んでいる。後に、山岳会百年史を編纂するに当たり、編纂委員会では武田久吉の記述や講演記録に最も信頼を置いた。この講演記録もそのなかの１つである。

創文社の広報誌『創文』72 号（1969 年５月号）に、武田久吉の「登山の発祥と山岳会」が載っている。見開き２頁という短いものである。『明治の山旅』発刊の２年前であるから、創文社は武田に本の出版を働きかけた折に、広報誌への執筆を依頼したのかも知れない。「登山の発祥と山岳会」のなかで、武田久吉は山岳会への激しい怒りをぶちまけている。「山岳会の結成に当たって、高頭君の

経済的援助の如何に力強く私達が感じたかは論ずるもないが、その申し出を確かめるために、わざわざ新潟県長岡在の高頭君の邸宅を訪問して、その確実性を調査してくれた城先輩の慎重な努力も決して看過さるべきものではない。日本山岳会六十周年記念講演会において、その秘話を発表したところ、それは虚構であって、調査に行ったのは城サンではなくて武田君だと、山岳会結成当時の内状も碌々知らない癖に、多人数の面前で私に赤恥をかかせたある有名な登山家があった。それにこういう者に講演を依頼した会の幹部にしてからがチト常軌を逸しているとしか考えられない。会の過去について語るというなら、少しは勉強して『回想録』ぐらいは読んで置くべきであるのに、うろ覚えの誤った話を平気でやるなど、その鉄面皮に愛想がつきる」と。

武田久吉が言う「有名な登山家」とは誰のことであろうか。『山岳』第六十一年には、武田の「山岳会創立前後」に続いて、槙有恒の記念講演「六十年を振返って」が載っている。槙の話のなかに「先ほど創立の時に城さんが高頭という越後の人間を、どんな人間かわからんから調べに行ったというお話がございましたが、調べに行ったのは武田さんであります。武田さんが行ってみて、帰って来てあれは大丈夫だと太鼓判を押されたのだそうであります」とある。すぐ前の講演で武田久吉が語った話を、本人を前にしてその話は違っていると言っているのである。槙有恒といえば、アイガー、マナスルで名を馳せ、影を踏むのもためらわれるほどの存在であった。それだけに、武田久吉とすれば「うろ覚えの話」は許せなかったのである。「登山の発祥と山岳会」を書いたのは、山岳会 60 周年の４年後のことであったが、広報誌という冊子スタイルの目立たない雑誌であり、この文章の存在は山岳会でもあまり知られていない。

『明治の山旅』の平凡社版は 1999 年発行であり、武田久吉没後すでに 27 年が経過している。創文社版を底本として出版するに当たり、編集者は遺族と相談して「山岳会創立前後」の掲載を決めたのだと聞く。その際、遺族には前掲「登山の発祥と山岳会」に書かれている武田久吉の心情が頭にあったのではないか。これは筆者の推測である。

ところで、平凡社版では尾瀬に関する記述のなかに「燧ヶ岳」という山が登場する。もちろん創文社版は著者本人が校正しており「燧ヶ岳」である。なぜ間違いが生じたのだろうか。再版に当たり、旧版の文章をパソコンで打ち直しするのでは大変なので、OCR（Optical Character Reader 光学式文字読み取り装置）を使ったに相違ない。印刷物の文字を、光を当てることで読み取り、テキストデータに変換するという画期的な装置なのだが、似通った文字に認識してしまう場合があるから、しっかり校正しないと、とんでもないミスが生じる。これは OCR で読み取った文章の校正ミス以外には考えられない。平凡社版のミスを、間違いにきびしい武田久吉本人が知ったら……などと考えながら、私は武田久吉という人を偲んでいる。

アメリカ合衆国の国立公園を訪ねて

横関　邦子

米国には現在 60 を超える国立公園があるが、今回訪ねたのは、そのうちの 2 か所、モンタナ州のグレーシャー国立公園と、ワシントン州のオリンピック公園である。ちょうどシアトルの東側と西側の両方向にある。

2016 年 8 月 29 日から 9 月 9 日までの 9 日間、それぞれの公園でロッキー山脈の雄大な山々と、太平洋と山の両方を 7 名の参加者と楽しんだ。行く前からワクワクするコースであった。

成田からシアトルにつき、さらに 1 時間プロペラ機でフライト。そこからは、大きめのバンをレンタルし、荷物を載せ自分たちの行きたいところへ、自由に移動できる。1 日目のホテルは、グレーシャー国立公園の少し手前のモーテル。アメリカ映画によく出てくる平屋で各部屋の前に車を止めるモーテルである。一休みしてからみんなで近くのスーパーマーケットに明日のお昼を買いに行く。山の中を歩くので毎日果物やパンなどを買い、翌日に備えた。この辺はベアカントリーとも言われ、熊対策も必須で、食べ物は密封容器に入れ、匂いが漏れないようして、運ばなければならない

バンとモーテル

次の日は朝早く、ロッキー山脈のローガンパスにある人気のトレッキングコースへ、いざ出発。晴天で真っ青な空の下、トレッキングを楽しんだ。低い場所は森や木があるが、コースは森を抜け、見上げればロッキー山脈の岩山の頂上、足元には高山植物が咲き乱れるという素晴らしいところ。リスなどの小動物も足元にちょろちょろしている。大きな野生動物もいると聞いていたけれど、と思ったら真っ白の大きなヤギがゆったり出てきて、しばらく写真のモデルをしてくれた。

次の日も専用車で別のトレッキングコースへ移動し、途中湖の美しい景色のところで休憩を取りながら、ロッキー山脈のいくつもの層になっている地層の話をしながら、何億年も前のことを想像し、人間のちっぽけさを感じながら、自然のすばらしさを満喫。

車で移動する間、膨大な場所が山火事で焼け、進んでも、進んでも木の幹が真っ黒焦げになっており、ただただ山火事の恐ろしさを感じ、でも山火事も自然の営みの中の 1 つと思った。あまりに広い範囲にわたり木々が燃え、その中で多くの動物たちも命をとしたのだろうと自然の力の大きさをひしひしと感じた。

シアトルに戻り、今度は太平洋側にあるオリンピック公園へと移動。広大なオリンピック公園だが車をレンタルしているし、荷物も車に乗せているので山にも、海にも、熱帯雨林にも身軽に移動できる。いただきに雪をかぶった山脈を見ながら展望台までのトレッキング、太平洋の海の波音を聞きながらの海岸の散歩、そして北半球では珍しい温帯雨林の森の中のハイキングなど、盛りだくさんの自然を楽しむ。温帯雨林の森の中は、苔が木の枝から垂れるように生えている。夜、ひとりでは絶対に歩きたくない、不思議な景色の、神秘的な森であった。

最後の日に散歩したシアトルの町は、すっかり都会。ショッピングモールがあり、スターバックスの 1 号店があり、シアトルマリナーズの野球中継がテレビの大画面に映り、また東京に戻り、都会の雑踏に戻る準備のよう。

アメリカの国立公園、また別の場所に行って、その自然の雄大さを感じてみたい。

トレッキングコースへいざ出発！
正面にクレメンツ山 2671 m

マウンテンゴート

温帯樹林

～～《予告など》～～

<u>3月山行 「観梅山行」</u>

榛名梅林は榛名山の南部に位置し、400ha の広大な土地に、約 12 万本の梅が植えられています。開花期には一帯が白一色の花に埋め尽くされ、梅の香りに包まれます。その花の中を歩きます。

ここには、担当の富澤の実家があります。60 年以上前の少年時代に、カブトムシ・クワガタ捕りや飼っていたヤギとウサギの餌の草刈りなどに走り回っていた所です。当時は、梅林ではなく雑木林でした。

・期日　12日（日）「観梅山行」＝群馬県・榛名梅林　**雨天中止**　担当：富澤克禮、夏原寿一
・集合　高崎駅　在来線改札口外　8 時 55 分
　　　バス「高崎駅**西口**　9時発 「権田行き」（3 番乗り場）」に乗車
・コース　高崎駅（バス）　→　エコール入口　→　エコール榛名　→　梅見公園　→　浅間山・浅間神社　→
　　　里見城址　→　城山稲荷　→　下里見（バス）　→　高崎駅　　・歩行時間：約 4.5 時間
・申込み 3 月 5 日までに夏原へ

＊ 観梅コースには山もあります。日帰り山行の装備でご参加ください
＊ コース内には売店等はありませんので、飲み物、昼食用弁当は持参してください。
▸ **高崎駅へ**（例）　＊往復購入で、ジパング割引が使えます♪
・湘南新宿ライン利用：　横浜（6:26）→渋谷（6:53）→新宿（6:58）→池袋（7:04）→大宮（7:30）→高崎（8:51）
・上野東京ライン利用：　横浜（5:53）→東京（6:20）→上野（6:26）→大宮（6:53）→高崎（8:16）
・北陸新幹線利用：　東京（7:52）→大宮（8:18）→高崎（8:42）「はくたか 553 号・金沢行」

4月総会開催と会費徴収について

日時　4月1日（土）　午後2時より　場所は　104号室
議題　2016年度事業報告
　　　2016年度決算報告
　　　2017年度事業計画案
　　　2017年度予算案
　　　その他

＊総会終了後は、横関さんに＜「アメリカの国立公園を訪ねて」と「スリランカ大周遊」＞のお話をいただきます。
＊同封のハガキは**3月25日までに**届くようにご投函ください。
＊新年度の会費＜1500円＞を徴収させて頂きます。欠席の方は下記の方法で納入してください。
・振込の場合：　ゆうちょ銀行から振込　10000－18539041　ﾘｮｸｿｳｶｲ
　　他金融機関から振込　008－18539041　ﾘｮｸｿｳｶｲ
・切手の場合：　82円切手を19枚（82円×19枚＝1,558円）を下記にお送りください。
　　端数の58円も会費として処理します。

瀬戸英隆

５月山行　5月13日（土）　詳細は次号でお知らせします。　（担当：荒井正人）

新入会員　渡邊貞信（会員番号 14388）

小林敏博（会員番号 15938）

会報を担当して　　夏原寿一

2015 年 4 月から会報の編集を担当してまいりましたが、今号から荒井正人さんにバトンタッチしていきます。原稿あっての会報。多くの方々から読み応えのある様々な原稿をお寄せいただきました。一方、お寄せいただいた原稿の内容が緑爽会にそぐわないと考えられるものは、筆者のお許しを得て掲載しなかったこともありましたし、表現を変えていただいたり、部分的に削除していただいたりしたこともありました。これらにつきましては筆者の皆さまが快く応じて下さったことを嬉しく思います。

そして、いままでお目にかかったことのない方々とも、会報のお蔭で電話やメールでお話しするようになったことや、皆様から頂いたお褒め手紙や励まし言葉に元気づけられたこともありました。ありがとうございました。

--- **編集後記** ----------

私にとって、槇さんは雲の上のそのまた上におられる方に思える。その槇さんについて、前掲「武田久吉のこと」に南川さんも「影を踏むのもためらわれるほどの存在」と書いて尊敬の念を表わしておられる。一方、武田には「うろ覚えの誤った話を平気でやるなど、その鉄面皮に愛想がつきる」と書かれている。ここには、私の持つ槇さんのイメージとは違う一面が見えておもしろい。槇さんとて完璧ではなかったと思えるところに和みを感じる。（夏原寿一）

夏原さんに教えを乞いながら、やっと初めての会報発行に至りました。パソコン教室で学んだはずの知識は何処へ行ってしまったかと情けない思いです。今回は12ページ建てです。山に登って、読んで、書いてという三位一体が緑爽会の底流にはあるものと思います。技術的なことも含めさらに学んでまいりますので、多くの会員の皆様からご寄稿いただけますよう、ご協力のほど宜しくお願いいたします。（荒井正人）　（記事中写真：筆者、カット：中村好至惠、写真：夏原寿一）

＜次号予告＞4月25日発行の主な内容
報告：　2月10日神﨑忠男会員による講演報告、3月山行「観梅山行」報告、4月総会報告
寄稿・投稿：　高辻謙輔会員「弥彦山と高頭祭」